**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第１００回　（２０２４年２月１３日）**

**・勉強範囲：「第四章　在家の人への助言」４８頁～４９頁**

**～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～**

**📖４８頁下段　１２行目**

**師（喜んで）「……彼のお慈悲がなければ心の疑いは消えない。自己の自覚なしには疑いは消えないものだ。**

**（解説）**

シュリー・ラーマクリシュナは、悟らなければ疑い（霊的な疑問や混乱）［👉前回の講義］はなくならないと言っています。その例がホーリー・マザーです。

ホーリー・マザーはジャイランバティという田舎生まれで、若い頃はそこから時々ドッキネッショルを訪れシュリー・ラーマクリシュナと一緒に暮らしていました。シュリー・ラーマクリシュナの肉体がなくなったあとは、コルカタにもいましたが、ジャイランバティでも長い期間過ごしていました。あるとき近くの田舎から１４，５歳くらいの男の子がジャイランバティのホーリー・マザーの元へやって来て、ホーリー・マザーのことを理解して、毎週土曜日学校が終わって土日をホーリー・マザーの元で過ごし、月曜の朝ホーリー・マザーのところから学校に行く、ということを繰り返していました。ホーリー・マザーもこの男の子のことを大変愛していました。当時ホーリー・マザーの元には様々な人が訪れていて、中には政府の役人や学者などもいたり、イニシエーションを受けたいとやって来る人もいました。彼らはホーリー・マザーに様々な霊的質問をしましたが、男の子はその様子を見て、内心心配でした。なぜならホーリー・マザーは学校で勉強する機会も、しっかりと聖典の勉強をしたこともなかったので（シュリー・ラーマクリシュナはバイラヴィというタントラのグルや、トター・プリというヴェーダーンタのグルから勉強したり、聖典の勉強をした僧やサドゥから説明を聞いたりしましたが、ホーリー・マザーにはそんな機会はありませんでした）、「ホーリー・マザーにそんな難しい質問をしても、マザーは答えられないかもしれない」と思ったのです。「ホーリー・マザーは素朴な田舎の女性なのだ。彼らはなぜブラフマーナンダジーやプレマーナンダジーやトゥリヤーナンダジーに尋ねないのだろう？」と。

のちに男の子は僧となってこのことをホーリー・マザーの回想録として残しました。その中にはこうあります──ホーリー・マザーは一度もあなたの質問には答えられませんとか、聖典が言っているそんな複雑なことを答えることはできませんとか、ラカル（ブラフマーナンダジー）やターラク（シヴァーナンダジー）に尋ねてくださいなどとは言わなかった、と。

ではなぜホーリー・マザーはすべての霊的質問に答えることができたのでしょうか。皆さん、ホーリー・マザーの教えの本を読んでください、その答えはとても短くて簡単なものでした（シュリー・ラーマクリシュナの福音とホーリー・マザーの福音の大きな違いは、シュリー・ラーマクリシュナの福音では長い説明がありますが、ホーリー・マザーの福音ではとても短くてシンプルだということです）。その短い答えを聞いて、質問した人はみな納得し満足したのです。それができたのは、ホーリー・マザーに超能力があったからですか？　なぜホーリー・マザーは答えられたのでしょうか？

参加者「ホーリー・マザーは悟っていたので、答えることができたのかなと思います」

本当にそうです。悟るとすべての疑いがなくなるから、言い換えると最高の知識（Highest knowledge）を得るからです。ブラフマンの本性はサット・チット・アーナンダ、そのチットが知識でしょう？　その知識、最高の知識、絶対の知識を得るからです。ですから、神について、人生について、霊的な生活について、創造についてなどの疑いを、みなはわざわざホーリー・マザーに尋ねるために彼女の田舎まで行ったのです。そして答えを聞いてとても満足して帰っていきました。

もうひとつ、『シュリー・ラーマクリシュナの生涯』の中から例を挙げましょう。シュリー・ラーマクリシュナの元には聖典や哲学を勉強した有名な学者も訪れていました。その人はシュリー・ラーマクリシュナと話したあと、「先生、今日は聖典や神についての話をあなたからたくさん聞きました。私はそれを本から勉強しましたけれども、その内容を、あなたの口から聞きたかったのです」と言いました。彼の頭の中にはサーンキヤ、ヨーガ、ヴェーダーンタ、ヴァイシェーシカ、ウパニシャド、バガヴァッド・ギーター、ラーマーヤナ、マハーバーラタ、プゥラーナ、アシュタバクラ・ギーター、ヴィヴェーカ・チューダマニなどが.いっぱい詰まっていました。けれどもそれをシュリー・ラーマクリシュナから聞きたかったと言いました。

頭脳を使って聖典を学ぶのと、悟った人から真理について聞いて学ぶのとでは、インパクトが全く違います。たとえばインドに行ったことがない人が、インドやインドの文化についてたくさん学校で勉強したとします。しかし本当にインドに行って現地の文化を見、食べもの飲みものを体験し、建物を見、市民が来ている服を見、言葉を聞き、音楽を聴いた人がインドについて話したとしたら、前者から聞くのと全くインパクトが違うでしょう？

本当に、勉強するだけで理解することはできません。どんなに勉強をしても、疑いは続き、新たな疑いが出、消えることはないからです。あるときベルル・マトに、「私は悟った」と言う僧が来ました。その人にプレマーナンダジーは尋ねました、「あなたは悟ったのですね？　ではすべての疑いはなくなりましたか？」　その人は最初「なくなりました」と答えたのですが、プレマーナンダジーが「少しもありませんか？　内省して答えてください」と言うと、その僧は「ちょっとあるかもしれない」と答えました。まだ悟っていなかったのです。

今までの話は、神すなわちアートマンを悟ると、神の恩寵ですべての疑いはなくなる、という実例です。次は、なぜ悟るために霊的実践がとても大事かつ必要か、という話に移ります。つまり、なぜ頭で勉強するだけでは不十分なのかということです。

なぜなら人生で起こる諸問題を解決するには勉強だけでは不可能だからです。人生の問題に頭脳的知識は全くと言ってよいほど助けになりません。ですが、霊的実践は助けになります。ですから実践が重要なのです。

勉強で理解したことが人生の苦しみ悲しみを消しますか？　恐れを消してくれますか？　私たちはもちろん勉強して「肉体はなくなるが、『私』という存在はなくならない」と知っています。それをバガヴァッド・ギーターから何回も勉強してきました。ですが、たとえば病気になったときに心配や恐れに圧倒されるのはなぜですか？　なぜならそれの関係（私は肉体ではなくアートマンだという）の実践をしていないからです。瞑想、識別、抑制の実践をしていないからです。それをせずに勉強だけで人生の問題を解決しようとして、不可能です。苦しみ悲しみはなくなりません。ですから何度も助言がされているのです、「実践してください」と。そして実践すれば、最終的に悟ることができます。

次を読んでください。

**📖４８頁下段　１４行目**

**人がもし神の恩寵を受けたなら、彼は何ものも恐れる必要はない。もし子供のほうが父親の手を握っているのであれば、子供は転びやすい。しかしもし父親が子供の手を引いているのであれば、そんな心配はない。**

**（解説）**

「神の恩寵を受けたらすべての恐れは消える」と繰り返して言ったあと、「父親が子供の手を引いているときには心配ない」と言っています。この「心配がない」とは「転ばない」ということですが、もう少し深く考えてみると、まず、この「父親」は母親やグルも意味していると分かります。グルが弟子の手を引いて一緒にいれば、弟子は困らないでしょう？　そして「転ぶ」というイメージですが、単に転ぶ様子ではなく「つまづく」というイメージをしてください。舗装されていない砂利道、泥道、あるいは急な坂道を歩いていて道の小石につまづく、そんなイメージです。この道は「人生の道」であり、転ぶとは「人生の道につまづく」という深い意味なのです。実際、人生の道はスムーズではなく、穴があったり泥があったり小石があったりたくさんのトラブルがあるでしょう？　苦しみ、悲しみ、恐れ、心配、ストレスなどがたくさんあります。人生の道は本当に良くありません。

シュリー・ラーマクリシュナは興味深い例を使いましたが、ほかにベンガルには、「子猫はミャオミャオ泣くだけで母猫が子猫をくわえて安全なところに移動する。子ザルはどんなに母ザルに抱きついていても時々母ザルから落下する」という言葉があります。その深い意味は、「努力だけで神を悟ろうとしても堕落する可能性がある。しかしもし神の恩寵を得られたら、危険なことは何も起きない」ということです。

グルもそうです。グルはミディアム（媒体）であり、グルと神は別々ではありません。『ラーマクリシュナの福音』にも「神の恩寵はグルの中から出る」、「川を渡る舟の船頭がグルである」とありますね。グルと神は別々だというイメージを持たなければ、その弟子に悲しみ苦しみはないのです。

皆さん、「信者になると誰でも楽になる」と誤解しないでください。「マントラを授かれば私の人生はスムーズになり何も問題が起きない」と誤解しないでください。そのようなことは全くありません。では信者（この信者とは、本当の意味の信者であり、浅い信者のことを言っているのではありません、本当に神を信じ、神に深く祈り、神について考え、神の御名を唱えている信者で、マントラを授かるだけという類の信者を言っているのではありません、イニシエーションを受けてなくても本当に神を信じ、神を自分の永遠の友達であるとか両親であると信じ、すべてを神にお任せしている人のことを言っています）と信者ではない普通の世俗的な人との違いは何でしょうか？　信者も普通の人も、人生で大変な経験は絶対にするでしょう？　そのことだけを考えれば両者とも同じです、では何が違うのでしょうか？

それは、信者は苦しみ悲しみの状態にあってもそれに圧倒されない、ということで、違いはそれだけです。世俗的な人はみな圧倒されますが、信者は大変な問題の中にあっても心はいつもしずかで心の中には幸せがあるのです。外から見ると大変なようであっても心の中はしずかです。

先日サンフランシスコのお坊さんから新年の挨拶状をもらいましたがそこにはスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの教えが書いてありました。そのメッセージの内容は、街の雑踏の中にいても（たとえば電車を待っているとき周囲はとてもうるさいですね）心は瞑想の時と同じようにしずかである、つまりうるさい環境、大変な状態になっても心がほんとうにしずかであったらそれは霊的な状態（spiritual condition）である、という内容でした。

環境は同じでも、ある人の心は不安でいっぱい、悟った人の心には不安がなくしずかで幸せです。道でつまづいて転んだら、とても痛いし出血するかもしれないし骨を折るかもしれません。そのようにして人生でいろいろなトラブルにあって大変なショックを受け、そのあと死ぬまでショックが消えずに日常生活が送れなくなる人がいますが、それが「圧倒された」一例で、それは普通の世俗的な人に起こることです。ですが悟った人もしくは高いレベルの信者は、同じ経験をしてたくさんのショックを受けても、毎日の生活を続け神への信仰も減りません。浅い信者や普通の人は、神への信仰が減っていくか、神はいないと考えるようになる場合もあります。神がいるのになぜこんな大変なトラブルにあうのかと考えるからです。そのようなことにならないように、シュリー・ラーマクリシュナは「お父さん、お母さん、グルが、息子、娘、信者と一緒にいれば、問題が起きても圧倒されない」と助言するのです。次を読んでください。

**📖４８頁下段　１７行目**

**もし神がお慈悲によって人の疑いを除き、彼に御自身をお示しになるなら、彼はもはや苦しむ必要はないのだ。だがこのお慈悲は、彼が深い渇仰(かつごう)の心で神に祈り霊性の修行を実践したあとに、はじめて彼の上に下るものである。**

**（解説）**

先程言ったように、霊的な実践をしなければ恩寵、神からのサポートは授かれません。続きを読んでください。

**📖４８頁下段　後ろから４行目**

**母親は、わが子が息をきらせて走りまわっているのを見たとき、かわいそうに思う。彼女はいままで隠れていた。いまや子供の前に姿を現すのである」**

**「しかし、なぜ神はわれわれを走りまわらせるのだろう」とMは思った。**

**（解説）**

Mさんはそのことを口に出したわけではないのに、シュリー・ラーマクリシュナはガラスケースの中を見るように、人の心中を見ることができました。シュリー・ラーマクリシュナに何も隠すことはできません。ですが、少しこわくないですか？　なぜなら私たちの心の中にはいろいろなものがありますから。

それについてこんな実話があります。その人はキロッコシャ・ビッダートという名で、劇の脚本家でした。また大学でも教えていて有名な教授でもありました。後年スワーミー・ブラフマーナンダジーからイニシエーションを受けました。あるときブラフマーナンダジーに泣きながら述懐したことがありました。「マハーラージ、私は若いころ、シュリー・ラーマクリシュナに会おうとしてコルカタの北のドッキネッショル寺院に徒歩で向かったことがありました。ですが中間地点のボラノゴル辺りで、ふとシュリー・ラーマクリシュナは人の心の中が読めるということを思い出しました。その頃の自分は欲望などいろいろなものが多くあったのです。それを考えると心配になり、私はそこから引き返してしまいシュリー・ラーマクリシュナに会わなかったのです。今ではそれを本当に残念に思っています」

この話には続きがあります──ブラフマーナンダジーはこうして慰めました、「あなたはシュリー・ラーマクリシュナに挨拶するためにドッキネッショル寺院に行きましたね。それが正しいですか？」「はい、正しいです」「あなたは本当はシュリー・ラーマクリシュナに会ったことがあります」「いいえ、マハーラージ、私は引き返したので、会ったことはありません」「いいえ、あなたは会ったことある」、そのように話していると、突然、マハーラージの場所にシュリー・ラーマクリシュナのヴィジョンを見ました。キロッコシャ・ビッダートはブラフマーナンダジーではなくシュリー・ラーマクリシュナが座っているのを見ました。

『福音』の説明に戻ると、Mさんは心の中で、「なぜ神はわれわれを走りまわらせるのだろう」と思いました。「走りまわらせる」とはtroublesome［訳：やっかいな、めんどうな、わずらわしい］でしょう？

なぜ「**母親は隠れて**」いるのでしょう？　『福音』の中に子どもがおもちゃで遊んでいる話がありますね。おもちゃに夢中になってお母さんのことなど忘れて遊んでいた子供が、突然お母さんのことを思い出してお母さんの所に帰りたい、と泣くお話です。もうおもちゃのことなど全く忘れて泣いていると、お母さんは自分の仕事をするのをやめて、子供のところに行って膝の上に抱きました。シュリー・ラーマクリシュナは同じ話をさまざまな説明に使いますが、それが『ラーマクリシュナの福音』の特徴であり、おもしろいところです。Mさんの問いに対するシュリー・ラーマクリシュナの答えを読んでください。

**📖４９頁上段　２行目**

**即座に、シュリー・ラーマクリシュナはおっしゃった、「われわれが少しばかり走りまわらなければならないのは、彼のなのだよ。だからじつにおもしろい。神はこの世界を、いわばお遊びにおつくりになった。**

**（解説）**

ここではいろいろ考えることがあります。まず、神は自分が遊ぶために宇宙を造った、というリーラーという考え方（the theory of lila）です。

リーラーは「遊ぶ」という意味で、「クリシュナのお遊び」がよく知られていますが、これはギャーナ・ヨーガというよりバクティ・ヨーガの見方です（この考えはウパニシャドに全くない、というわけではありません。あるウパニシャドには「ブラフマンがあるとき考えた、『私はひとりでさみしい。だから私はたくさん（many）になろう』と。宇宙はそのようにして創造された」とあります）。

リーラーはバクティのとても大きなテーマとなり、その説に関する討論もありました。『ラーマクリシュナの福音』の中でもある信者が率直に「神のお遊びは分かりますが、神は遊んでいても私たちはとても大変です」と尋ねるシーンがあります。西洋の『イソップ物語』（その源はインドです。インドからアラビア、ターキー、イラン、ギリシャからヨーロッパに入りました）に、雨を喜び鳴いている池のカエルたちに、子供たちが小石を投げて当てるという話があります。カエルがなぜ石を当てるのかと尋ねると、子供たちはただ遊んでいるだけと答えました。カエルはあなたの遊びは私たちの死の原因になっていると言いましたが、そのように、私たちの人生も大変ではありませんか？　その信者の問いに対するシュリー・ラーマクリシュナの答えは、答えるというよりも「識別してください、あなたはどなたですか？」という質問でした。なぜ質問を質問で返したのでしょう？　この２つの質問にはどのような関係があるでしょうか？

（参加者）あなたはどなたですか？　私たちはアートマンですから、死にもしないし、ケガすることもない。

ここの前後関係では、アートマンとか不死ということではなく、識別をすると、神は遍在であなたの存在は神である（神があなた形になったと分かる）ということ、宇宙のひとつひとつの形になっているだけでなく、ひとつひとつの中におられる、ということ、だから神は神ご自身と遊んでいるのだ、ということです。これはとても深い識別です。以前マスクの話をしましたが［👉2023年12月講義録］それを思い出して下さい。しかし、もし、神と自分は別々の存在であると考えると本当に人生は大変です。そうではなく、神は神ご自身と遊んでおられる、私も神である、私も神と遊ばさせて欲しい（But if we think God is playing with God, I’m also God, let me play with God.）、と考えると何も大変ではありません。たとえばサッカー選手はゲームの最中にケガをしてもそのままゲームを続けて遊んでいませんか？　負けて悔し涙を流しても勝って嬉し涙を流しても、またゲームを始めませんか？

そのような普通のゲームと違うのは、「神が私と一緒に遊んでいる」という意識です。「私は神を愛している、だから私はOK、神よ遊んでください、大変な遊びであっても大変ではくてもすべてあなたの遊び」という意識がずっと続くと「幸せ」になるということです。大事なことは、神の意識がいつも続いているということで、それが条件です。

リーラーについて、もうひとつ、別の見方があります。これはギャーナ・ヨーガの見方ですが、傍観者（witness）になる、ということです。バクティ・ヨーギーはゲームのプレーヤーになるのですが、ギャーナ・ヨーギーはゲームの傍観者という立場でゲームを見ているのです。

かつてトゥリヤーナンダジーがシュリー・ラーマクリシュナに言ったことがありました、「私はすぐに解脱が欲しい。プレイするのは好きではない」（I don’t want to play but I want to liberation soon.）と。シュリー・ラーマクリシュナは「なぜお前はそんなに利己的なのか」（Why are you so selfish?）と言いました。「神はお前と遊びたいのだ。だから遊びなさい」（He is like a talking with a selfish person. God wants to play with you. So you should play. Why do you want to run away from play?）と。考えて下さい、シュリー・ラーマクリシュナの答えがいかに霊的にハイレベルな見方であるか！　「神は遊びたい、ですから私たちも遊びます、なぜなら神と私たちに違いはないから、私たちは神のひとつの形だからです」と考えれば「神がどんなに大変な状態をつくっても、それは『お遊び』と理解したから私は大丈夫、あなたがよければもっともっと大変な状態を送って下さい、私は全然平気です」と言えるでしょう。そして最終的に疲れると、神は「OK、あなたはもう遊ぶ必要はありません。解脱しましょう。私と一緒に住みましょう」（You don’t need to play anymore. Now, I give you liberation. Come with me. Stay with me.）となるでしょう。

今は、神の遊びのことは忘れて、普通の人のことを考えて下さい。彼らは遊びが好きで、美しい景色、おいしい食ベものや飲みもの、家族、お金、名声が好きです──それらはそれぞれ種類は違いますが遊びのものです。みな、遊びが好き──それが普通の人の、普通の状態です。そして遊んでいますけれども遊びの結果、時に楽しくても、苦しみ、悲しみ、恐れ、失望などたくさんの大変な目にあっているのも普通です。ですが、やめたくない、遊びたい、というのも普通です。ということは、Mさんの質問（「なぜ神はわれわれを走りまわらせるのだろう」）に対するもうひとつの答えは、「それは私たちが走りまわることが好きだから」ということもできます。

では、なぜ神は、母親が子供に言うように「もうやめなさい」とは言わないのでしょう？　なぜなら私たちは子供ではなく、自分で自分のことをよく知っているからです、「大変だけれども遊びはやめたくない」ということを、何回も生まれて何回も遊んでまた死んでまた遊んで、それをやめたくないと、知っているからです。ですから何回も大変な状態の中に入って大きなショックを受け、やがてその経験が少しずつ少しずつ私たちの中にたまって、ある人生で「私は何回も何回も生まれ変わって経験して理解した。また生まれ変わるとしたら、また大変な苦しみ悲しみがいっぱいで少しの楽しみしかない」と分かると「もう遊びたくない」と解脱のやる気が出ます。神はそこまでの経験を得させるために、「遊んでください、遊んでください」と遊びを用意して経験を積ませようとするのです。神の目的は、私たちが苦しみ悲しみという大変な経験をとおして学ぶことです。

ある人は少しの苦しみ悲しみで学びます。ある人はその勉強のために何回も苦しみ悲しみ大変な状態を経験しないとなりません。そうしないと「道」が変わりません、それが一般的な人のケースです。人生の本当の意味は何？　９０％苦しみ、１０％楽しみです。その勉強のために、何回も何回も何回も生まれ変わり生まれ変わりが必要です。しかし賢い人はそうではありません。そのことを考えると、「なぜ神は私たちを走りまわらせるのか？　それは私たちが走りまわりたいからだ」（Why God want to make us run? Because we want to run. We love running.）という答えが出るのです。

次を読んでください。

**📖４９頁上段　５行目**

**これがマハーマーヤーと呼ばれているのである。それだから、人は母なる神、つまり宇宙力そのもののもとに身を寄せなければならないのだ。われわれを妄想というでお縛りになったのは彼女なのだから。この枷が断ち切られてはじめて、神の悟りは可能となるのだ」**

**（解説）**

これは次のクラスで説明します。

**（賛歌奉献）**（映像データの１：３２：２６頃）

ガホレー　ジャヨジャヨ　ラーマクリシュナ　ナーム

**（Q＆Aより抜粋）**

**Q）**神の遊びだという考えも、ギャーナの考えと言えないのでしょうか？　例えばそういう知識がないと、神の遊びだという考えも出ないのではありませんか？　それは、知識として、それはギャーナの知識とは言わないのでしょうか？

**A）**先程言いましたが、ギャーナ・ヨーガの中に遊びの考えが全くない、ということではありません。ですがギャーナ・ヨーガの中に、「傍観者」というアイディアがあるでしょう？　神の遊びも、自分を周囲の環境や物事と同化させないで傍観者のように見るのです。すると心はしずかになり幸せになります。しかしシュリー・ラーマクリシュナの言うことは、傍観者ではなく、あなたもプレーヤーになってください、です。それはバクティ・ヨーガの言うことであり、それがひとつの見方です。もうひとつがGod is playing with God.つまり、あなたは神と別の存在ではない、あなたも神だという見方です。そのようにして自分が自分で遊んでいる（I want to play with myself. So, God is playing with God.）と考えると、大変な状態についての見方が全く変わってくるでしょう？

シュリー・ラーマクリシュナの言葉について、私はいろいろな説明をしました。その中から自分に合うものをとって実践するためです。私はこの見方が好きですというものを、実践してください。そのオプションのために、私は色々な見方を紹介しました。　　　　　以上